

瀧澤家 壬辰日記 (五)

自天保三年二月十四日
至同年二月廿七日

校訂者

洞暉 峻康 隆岡 村千 曳
富雄 鵜月 洋

まえがき

さきに「早稲田大学図書館月報」三十七号（一九五七年九月）より四十号（一九五八年六月）にかけて、翻刻紹介した、滝沢馬琴の自筆になる天保三年の日記「壬辰日記」は、「図書館月報」の発行中止にもなつて一時中絶していたが、今回、あらたに、「図書館紀要」が発足するにあたり、ふたたび掲載をつづけることとした。今回の掲載分は天保三年二月十四日よりの部分であるが、これまでの分は前記「図書館月報」を御覧いただきたい。

校訂の方針は、前回までと同様、できるかぎり原本に忠実であることを期し、あきらかに誤りであるとおもわれる箇所も、いちおうそのままに覆刻した。そのさいに当然必要である校訂上の注や、釈文上なくてはならないとおもわれる注も、他日これを単行本として公刊するさいに附すこととして、ここではただ本文だけを正確に翻刻することとした。ただし活字化することが目的であるから、すべての草書体はこれを楷書正字にあらため、変体仮名は現行の平仮名にあらためた。とくに片仮名の意識で書かれた片仮名、当時特有の用字法、著者独特の用字法、日記体の特色などは、なるべくそのまま保存するように十分留意した。原本には丁記がないが、翻刻にさいして、丁数を示すために、一丁目表の終りには（一オ）、一丁目裏の終りには（一ウ）と記した。

（鵜月 洋）

○十四日 壬辰薄曇春寒夕七時頃ヨリ雨無間斷

風アリ深夜風止

一地主杉浦清太郎女三才今朝明々六時死去のよししらせ
來ル依之朝飯後宗伯悔ニ罷越其後お百をも悔ニ遣ス今
日申刻送葬のよし菩提所小日向のよし也宗伯此節風邪
にハ候ヘ共寺迄送り候つもり及示談

一タ七半時過下女うめ引移リ早夜具せんたく致候処未出
來候間四五日借用いたし候よし申候三四ウかし夜具取
出させかし遣ス宗伯此節風邪の処風雨中にて難義のよ
し也

一昼時丁子やより使ヲ以八犬傳八輯四の上さし画の巻出
來筆工ニ書入いたさせ見せらる則筆工写本へはり入同
書戸びらもくろく稿本三三丁共ニ右使ニわたし遣ス

一タ七時過雨中杉浦清太郎小女兒送葬出棺宗伯礼服のし
め十德にて供人足左兵衛召連寺迄送之駒込富士前一向
宗長慶寺のよし夜ニ入六半時過歸宅人足ちん左兵衛ヘ
遣ス

一暮六時過丁子や平兵衛來ル予對面俠客傳明日うり出し
候よしにて製本二部金百疋被贈之并ニ外注文本宅部持
參請取早尙又宅部外ニ美少年錄初編より三編迄宅部ツ
、いせより被頼候分一兩日中差越候様及示談右用向早
て歸去

一八犬傳八輯自序稿案終日にして未脱稟今夕四時過就寢

○十五日 癸巳昨夕雨無間斷 昼後ヨリ雨止テ不晴

一昼後清右衛門爲當日祝義來ル入齒つなぎ直しの事杉浦
へ進物ろうそくの事可申付処失念雜談後歸去但過日申
付候みのかみ二帖中やにてかひ取持參請取おく

一宗伯風邪頭痛甚敷よしにて終日平臥

一予八犬傳八輯自序二丁半稿之然とも再思尙未穩處有之
依之此二丁半又不用明日又書直スへし今夕四時過就寢

○十六日 甲午曇昼後しはらく日出て又曇

一画工歌川廣重來ル廿三日兩國柳橋大のし富八樓にて書

画會いたし候よしにして右すり物一枚持參口上申述歸去(十五才)

一屋後お秀來ル小兒へ手みやけ持參雜談後歸去

一予八大傳八輯自序稿し終ルといへとも尙添削多し再考終日未果今日四時就寢但八半時比より屋代氏ニたのまれ候遺老物語第廿卷誤写校訂今夕校了

○十七日乙未曇早朝小雨
程なく止

一昼時前中川金兵衛八大傳八輯四の下の内初丁より十迄筆工出來并ニ四の上さし画の壱かき入いたし持參請取おく

一右已前四時過画工柳川重信來ル八大傳八輯四の下さし画の壱一枚出來見せらる是より板元丁子やハ罷越候よしニ付右さし画直ニわたし遣ス柳川手みやけ二種被送之

一屋前いせ松坂旅客小津新藏小あみ丁同人店より使札外よりもらひ候よしにて鮮鯛一尾被贈之且俠客傳うり出し候ハ、差越くれ候様申來ル右返翰并ニ俠客傳壱部右

使ニわたし遣ス

一暮六時前丁字や平兵衛より小ものを以八大傳八輯四の下さし画の壱筆工ニ書入致させ見ニ差越候間筆工写本にはり入并ニ先刻中川氏持參の四の下十丁迄の写本四の上さし画の式ト共ニ二綴外ニ自序稿一綴序文の料帛四枚さし添右小ものニわたし遣但先夜申談候俠客傳尙又美少年錄初編より三へん迄差越しくれ候様口狀書を以申遣ス

一予八大傳八輯自序壱丁半書直し夕七時比同書四の下十丁迄校訂今一度よみかへし可改思ひ二丁程よみかへし候内丁子やより使來候間不及再校右写本序文稿等わたし遣ス□夜ニ付夜分ハ休息四時過就寢(十五ウ)

一宗伯外邪とかく同様にて未及癒快然処夕方より持病の口痛のよしつよく不痛(三、四字虫咬)頗難義のよし依之半起半臥也連日春寒甚し彼岸中氣候不順也

○十八日丙申薄曇屋後小雨
程なく止暮六時比より雨

一昼後清右衛門來ル卯年店勘定帳七月分已來改檢を乞ふ

帳面請取おく予下入齒牛込吉田源八郎に申付繫直し置
事并ニ地主杉浦へ明日進上の事申付おく

一同刻小津新藏來ル例のごとく長談夕七半時比歸去手製
の赤豆團子供の小さいものへもふる舞かねてたのみの美少
年録初編より三部并ニとの村佐五平たのみの俠客傳二
部の内一部へもはや外より爲登候よしニ付屯部遣ス此
代金の内にてとの村へ返却の三才發秘飛脚ちん三久差
引小津新藏へわたし右差引残り金子金屯兩ト百四文請
取委曲別帳ニ記之

一 昼前丁子や平兵衛より俠客傳屯部美少年録初編より三
編迄屯部ツメ四部差越ス請取おく但此内俠客傳不用
ニ成幸便次第丁子やに返スヘシ

一 今日彼岸中日ニ付赤豆團子製之家庶奉獻供右殘小重ニ
入清右衛門ニもたせ遣ス家内一同并ニ來客へも出し御
成道めてたや老母方へも食籠ニ入遣之

一 八半時比渥見覺重來ル遺老物語十八の巻深川より写し
出來持參請取之尙又廿の巻料幣差添十八の巻筆料式百
八文共覺重ニ渡之手製團子覺重子供方に遣之預ケ置候

ひな長持近日差越しくれ候様おみち示談早て早ニ歸去
一 宗伯口痛并惡寒にて半起半臥但口痛ハ大起リニあらず
一 昼後より來客にて休筆遺老物語屋代氏本十九の巻全廿
三丁誤写校訂今夕四時就寢(十六才)

一 八半時比本郷笹屋伊兵衛より使ヲ以赤飯一重并かつを
ふし五引物もちくわし等被贈之増養子弘先月此方より
祝ひ遣し候答札也來客中ニ付家内請取おく

○十九日丁酉昨夜雨天明後雨止又折々小雨入夜ニ本降雨

一 昼前清右衛門來ル昨日申付候箱入ろうそく持參昨日の
もめんいと代共金屯朱遣之且昨日さし置候店勘定帳一
覽返之尙又信州より注文神女湯之事及相談候間二わり
引ニいたし内五分ハ清右衛門方へ引おとし先方へハ一
わり五分引ニいたし遣し候様示談但神女湯此節切レ目
ニ付廿包の内先十包遣し候様申示し此方に包置候有合
九包遣之且又清右衛門地主勘定遣スニ付明日小林氏に
罷越候序石町迄罷越信州より注文之神女湯飛脚へ遣し
候よしニ付右便路小傳馬丁丁子や平兵衛方へ俠客傳一

部返し候様申付右之本もたせ遣ス

一地主杉浦清太郎亡小女今日初七逮夜箱入ろうそく但三十挺入遣之夕方同所より茶飯一汁三菜送り膳にて被贈之

一いせ松坂人小津新藏より小ものを以昨日貨進候下駄并傘二本被返之家内受取おく

一予今朝より越後塩澤鈴木牧之^之之年始狀并先月來狀之返翰極長文一通認之尙又いせ松坂殿村佐五平へ遣し候長文書狀一通認之今夕五時書をはり且く休息四時比就寢

○廿日戊戌曇終日不晴春寒

一昼飯後より宗伯飯田町へ罷越小松屋にて神女湯劑藥種注文いたし清右衛門方へ立寄(十六)候処おさきハ龍門寺へ墓參清右衛門ハ在宿のよし歸路又立寄候処おさき歸宅のよし(二、三字虫陰)小松やにて江戸志を三右衛門所藏のよし宗伯歸宅之節物語ニ付かりよせ候様申付おく
一昼後杉浦清太郎繼母來ル亡小兒病中の諸謝礼并ニ宗伯

へ藥礼金百足持參のよし宗伯他行中ニ付おみち請取おく難談後歸去予不及(以下脱)

一予今朝より越後塩澤鈴木牧之頼之画贊ものきぬ地六枚唐帗半切物大小十三枚たんさく十三枚染筆夕七時比筆し早夫より昨日認置候書狀とし玉合卷等一封ニいたし又右之画贊物一封ニいたし右二包板おき又松坂との村氏に遣し候書狀封し早て今夜四時比三才發秘天の部三四二冊披閱内四の冊半分迄にて就寢
今日より春分の節ニ入候処朝夕甚寒し時候尤不順也

○廿一日己亥半晴風

一今朝宗伯地主杉浦繼母に昨日之藥礼謝義として罷越申度候口狀申演候処繼母被申様心得かたく候ニ付後相ことわり右もくろく返却いたし罷歸候よし告之

一昼前いせ人小津新藏來ルかけ合の屋食供の小ものへも振舞昼後そは切ふる舞煎茶くわし等少々出之來ル廿五日出立ニ付暇乞のよしニ付殿村佐五平へ遣し候書狀一封頼遣ス右ハ正月十五日出書狀之返事并ニ俠客傳本代

の内に三才發秘脚ちん三匁引落させ十二匁うけ取候
事杯巨細ニ申遣ス夕七半時比歸去是迄しばし終日長
坐にて殆及難義今日切ニ付相應にもてなしひまあけた
り

一同刻大江久米藏來ル父金藏より之書狀持參かへさに返
事を可申受旨申置歸去右ハ道書（七、八字読メズ）の出處の事火消

中間をガエンといふ痘神を唐山の小説杯にも載（七）
おせ候哉否之事被問之カエンの事痘神の事管見の趣
書記し遣之薄暮久米藏立より右報翰受取歸去○小松や
三右衛門小もの注文之藥種持參委細ハ末へ記之

一右已前關忠藏家内より使札小兒弄物三種被贈之且先日
やくそくの俠客傳借覽いたし度よし申來ル返書さし添
俠客傳右使はわたし遣ス

一昼後清右衛門來ル彼岸中ニ付牡丹餅持候よしにて一重
持參且過日申付候入齒吉田源八郎方にて申付出來内三
枚損し候ニ付取替候ニ付代金壹朱のよし也右代金一朱
清右衛門ニわたし遣ス右入齒箱へ入置候ふるき造り齒
多紛失いたし候間代金遣し候節吟味いたし候様申付お

壬辰日記

く尙又今日御藏前迄罷越候よしニ付越後塩澤鈴木儀三
治へ遣し候紙包二ツ新大坂下二見や忠兵衛方迄差遣し
候様申付包二ツの内小包一ツの脚ちんわたし遣ス大包
一ツハ先方の品故越後拂故也右用談早て早く歸去但牧
之画壽星の圖一枚予贊いたし候を清右衛門へ遣ス

一昼後御藏前坂倉屋金兵衛爲年札來ル予并ニ宗伯對面と
し玉被贈之小津新藏來居候内ニ付一席にて雜談数刻歸
去

一暮六時前正中ニ付吉時ニ付如例星祭家内一同拜禱し
早

一暮六時過杉浦清太郎親類のよし杉浦清左衛門といふ仁
來ル宗伯對面右ハ今朝宗伯返却いたし候藥札の事段々
意味合被申述則持參被贈之依之宗伯不得已受取早但宗
伯應對不行届候ニ付あとにて予いましめおく向後のこ
ろ得の爲也

一今日終日來客ニ逢廢業今夕四時就寢

○廿二日庚子晴風（七セウ）

一昨日飯田町小松より神女湯劑注文之藥種差越候処その内かけ目不足の藥種有之其段申遣し候へハ又不足の分持參但宗伯より三右衛門に手搦遣し候江戸志借覽いたし度旨申遣候処口狀行届かね候は付不足の藥種のみ持參江戸志ハ不持參依之尙又清右衛門に申付置追日小松やに罷越かり受持參候様宗伯申談し置候よし也

一今日太郎誕辰に付赤豆飯一汁二菜昼飯一同祝之且諸神へ獻供奉祭之

一予俠客傳校本三通り取しらへあはせおく其内巻の卷序目巻丁ツ、不足則書写し入おく右三本かりとぢいたし一本ツ、わけおく娘共へ爲可遣也朝より夕七半時比しをはる夜に入三才發秘天の部四冊め披閱早地の部五冊めよみかけ今夕四時就寢宗伯鬱塞にて半起半臥也

○廿三日辛丑晴

連日來
寒甚

一昼後清右衛門來に申付置候越後牧之に遣し候紙包二ツ一昨日二見やに差出候小紙包の脚ちん四十八文遣し候處飛脚ハ未參合候よし告之且先日とり遣し候入齒小齒

数枚之内二枚おさきとりおとし宿に有之候よしにてわつかに二枚持參見候処それハ不用に成候もの也一体十餘枚有之内こわれ候生齒も有之候処不始末之趣いましめ尙又源八郎方等致吟味候様申付おく然共怠狀も不申歸去

一夕前御藏前坂倉金兵衛より使ヲ以過日やくそくの薪のけふり三冊被貸之且外より被頼候よしにて白扇五枚たんさく数枚差越し染筆を乞ふたんさくの内三枚好の歌あり尙又兎園集後集借覽いたし度旨申來又兩三日使を差越可申よしにて今日の使差置歸去

一今日夕方画工北溪爲年礼來に且奥州仙臺の人に被頼候よしにて書画帖持參染筆を乞ふ夕方付書画帖ハ預りおく雜談後早に歸去十八才

一昼飯後より宗伯松前兩やしきへ罷出る當月十五日風雨に付不參のかはり也且松前内藏に被頼候椿年画一昨日清右衛門を頼椿年方へ遣しとりよせ置候右之画今日松前内藏に渡候尤画料百疋椿年落手の手紙爲念差越内藏へ見せ候よし薄暮に及び宗伯歸宅

一過日おみち清右衛門ニ頼置候よしにてかしまや白龍香
清右衛門持參右代四拾文予の方より遣之

一予八犬傳八輯上帙表帙画稿袋画稿共ニ二枚稿之終日也
此内袋画稿不宜ニ付明日晝直スヘしその間江戸志一の
巻処々一覽右江戸志小松やよりかり置一の巻一冊今日
清右衛門持参いたし候間請取おき候也夜ニ入薪のけふ
り三冊の内一の巻披閱早て四時就寢

一當月餘寒甚し中旬箱山大雪にて往來五日とまり候よし
此外信州より上州辺迄大雪のよし風聞あり江戸の寒サ
寒中のことくなるハ此故なるヘシ

○廿四日壬寅薄曇日暮より小雨

一昼後田口久吾より宗伯へ使札先年やくそくの海棠根わ
け一株贈來ル宗伯返事申遣候爾後東三疊脇小畠角ヘ植
つけ早

一タ七時比土岐村元立より予へ使札右ハおみち年始ニ遣
候ハ、三月十五日元立實父三十五回ニ付右逮夜ニ茶飯
申付候間其頃罷越候様いたし度尤兩三夜も止宿致させ

壬辰日記

候よし老尼被申二、三字虫喰申上候様申來ル予扇面書にて候故

宗伯より承知之趣申遣し候様申付返書則宗伯書して遣
ス

一宗伯昨今神女湯劑製之但不快中ニ付多く製せず

一予八犬傳八輯表かみ并ふくろ画工晝直し分二枚稿之昼
過月代いたし夫より坂倉や金兵衛十八頼の短尺十
一枚扇面七本染筆尙又北溪頼之画帖へ歌一首書入等
にて消日早夜ニ入薪のけふり中の巻半分餘披閱今夕四時
過就寢

一昼後お百太郎を携ゆしま天澤山近處伊勢や太郎兵衛店
へ肝臓円かひ取ニ罷越夕七時過歸宅○夕方より宗伯持
病の口痛にて平臥

○廿五日癸卯昨夜より天明曇四時比晴夜ニ大風烈終夜

一八犬傳八輯序文直し度所有之依之梅を以筆工金兵衛方
ヘ遣し右稿本丁子や參居候ハ、返しくれ候様手紙を以
申遣候処當番のよしにて返事不來

一今日より八犬傳八輯下帙五の巻ニ取かゝり候処しはら

く休筆後ニ付筆不進わつかに一丁弱稿之夕方より江戸志一の巻披閱今夕四時就寢

一今夜四時比小石川辺のよし遠火あり火元詳ならず

一本所辺又失火あり夜中九時過の事也後にきく回向院うら通り亀澤丁より三間町迄凡三町許延焼のよし也大風の処川向故不及大火曉方火鎮ル

一夜食後宗伯地主杉浦方へ罷越過日藥札の謝を申入且小兒病痾等を幾之介ニ示談老母ハ他行にて宗伯辞去候節歸宅のよし也宗伯ハ六半時比歸宅

○廿六日甲辰晴風烈夜ニ入風止

一早朝中川金兵衛八大傳八輯四の巻の下十一丁めより廿一丁半終迄十一丁半筆工出來持參且序文稿本ハ板元より未参よし取次のものへ申述歸去其後右写本校閲誤字しるしつけおく(十九才)

一昼後清右衛門來ル入齒師吉田源八入齒つくろひ代請取書持參且過日とり遣し候入齒源八方へも尋候処源八他行ニ付しれかね候よし申候途中にてとり落し候事と存

戒おくといへともせんかたなし清右衛門歸路おみちたのみ覺重方へ過日やくそくのひな長持之事申遣ス

一薄暮渥見覺重來ル深川久和嶋雲磴より遺老物語廿の巻写し出來持參筆料百四拾文之処勘定ちかひいたし百七十二文遣之廿四文過十九の巻にて引落すへしこの事あとにて心つく依之その段別帳へしるしおくひな長持の事來ル廿八日ならてハ取出しかたきよし覺重おみちへ申聞候よし右用談早て歸去久和島方へ同書十九の巻料帑差添鳥目共遣之

一予八大傳八輯四の下写本校合にてひま入昼後より同書五之巻の内わつかに一丁程稿之夜入休筆四時就寢

○廿七日乙巳薄曇風なし

一今朝正六時比長者町通り小笠原屋敷門前脇ニ失火有之幸ひに風ハ無之候へ共東北風にて東風まさり火の粉少々此方へ飛來候宗伯早速起出おみちをおこし其後宗伯火元見届に罷越候内火鎮ル火元の家井ニその隣家半燒歟不及大火故何方よりも見舞の人不來

一右ニ付朝飯後梅を以中川金兵衛方へ手紙にて火事見舞申遣メ梅罷歸り火元ハ町家にあらず小笠原殿やしきうしろの方長者町通りの小やしきニ軒焼失一軒ハ臺所の方残り候を消防の爲うち崩し候よし申之尤金兵衛方ハ八大傳八輯四の下写本書そん多く有之よしも申遣取込ト存遠慮いたし写本ハもたせ不遣也

一屋飯後早々予并ニお百太郎同道深光寺ニ墓參且鎮守妻戀神田兩社へ參詣余ハ当年初度の外出也正月中よりしは〳〵雨天或ハ風烈にて漸く及今日夕七時過歸宅(十九ウ)

一右他行中音羽町板木師伊兵衛來ル同人今日芝泉市方へ罷越候処言傳有之金瓶梅三編稿本催促のよし但泉市方甚取込之義有之依之手紙不差越よし也此節小女瘡(マ)疱(カ)かと推量也(三、三字虫喰)傳通院前にて右伊兵衛にあひぬ此方へ參

候よし申之

一夕七半時比中川金兵衛來ル予對面八大傳八輯四の下の末写本誤写有之し入をく直し候様申談し右写本并ニ一の卷七ノ下八大士歌稿本半丁料昏差添是又わたし遣メ金兵衛義七年前召仕候下女之義ニ付元請人ニ不引渡当人あね方へ引渡し候ニ付此節元請人度ニ罷越彼是むつかしく申及迷惑候右一義にて取込筆工及延引申之歸去

一宗伯今日神女湯劑大かた製し早りふるひわけ等終日也
一予他行ニ付休筆也腰痛ニ付途中杖を用ふ但予他行中渥見覺重より預置候ひな長持もたせ差越すおみち請取人足ちん百文遣之者人前四十八文ツゝ也

一今日休筆他行ニよつて也歸宅後休息今夕薪の煙中の卷不殘披閱四時就寢